

ケーニヒスベルク大学哲学部とカントの大学論 ——『学部之争い』の大学史的意義をめぐって——

The Relationship between the Department of Philosophy at
Königsberg University and Kant's theory of the University:
Regarding the historical significance of "The Conflict of the Faculties"

藤井 基貴

はじめに

- 1 18世紀後半のケーニヒスベルク大学哲学部
- 2 カント『学部之争い』における哲学部の位置づけ
- 3 カント大学論の大学史的意義

おわりに

はじめに

1798年晩秋、カント (Immanuel Kant, 1724-1804) は『学部之争い』という風変わりなタイトルの書物を公刊した。同書は、カントが直接まとめた最後の著作と言われており、晩年のカントの思想展開を知る上で重要な文献の一つに数えられている。また、カントが大学について具体的に論じたのはこの書物をおいて他にはなく、同書はフンボルト (Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)、フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814)、シュライエルマッハー (Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher,

1768-1834), シェリング(Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854)らの大学論に刺激を与えた書物として、ベルリン大学の構想に影響を与えた一連の大学論の嚆矢に位置づけられている。

こうした事情から、同書は哲学者のみならず、大学史家からも関心を集め、すでに一定の研究の蓄積がある。管見の限り、その中で論究されてきた研究課題は、大きく三つに分けることができるように思われる。第一の課題は、ディルタイ(Wilhelm Dilthey, 1833-1911)が行ったように『学部之争』の成立事情がプロイセン政府による検閲の問題とどのような緊張関係にあったのかを解明することである。そこでは、カントの大学論および宗教論と国家による言論統制の問題が分析の対象となる¹⁾。第二の課題は、『学部之争』に示されるカントの大学論を整理・検討した上で、同書の内容とカントの主要著作の間にはどのような内的関係が認められるのかを分析することである。こうした研究成果として近年注目されているのは加藤泰史による研究である²⁾。加藤はカントが『啓蒙とは何か』で示した「理性の公的(公共的)使用」、「理性の私的使用」の思想的意義を積極的に評価し、それが『学部之争』の重要な論点の一つになっているという理解を示している。第三の課題は、カントの大学論が大学史においてどのように位置付けられるかを検討することである。近年ではカントとシェリングの大学論を比較・検討したデリダ(Jacques Derrida, 1930-)による研究や、大学史の一つのメルクマールとして「カント的大学」を位置づけ、それが現在どのような展開を迎えているのかを考察したレディングス(Bill Readings, 1960-1994)による研究がある³⁾。

本稿では、上述の課題に対する先行研究の成果を整理・検討する作業に加えて、『学部之争』で示されたカントの哲学部に対する理解と、カントが実際に在籍した18世紀後半のケーニヒスベルク大学哲学部の実態がどのような関係にあるのかを新たな研究課題として設定したい。その理由は、1)『学部之争』の意義をケーニヒスベルク大学哲学部の歴史

的展開という文脈において位置づけ、2) その構想がどこまで哲学部の実態と対応しているかを考察することを通じて、カントの大学論の歴史的意義がより多角的に解明されうると考えるからである。

そこで本稿では次のように考察を進めていく。まず、カントが在籍したケーニヒスベルク大学哲学部の実態を解明する。続いて、『学部の争い』よりカント大学論の特徴を抽出する。その上で、先行研究の理解を整理しながら、カント大学論の大学史上の意義を再検討する。

最後に扱った史・資料について付言しておく。18世紀ケーニヒスベルク大学哲学部の歴史を分析する際に活用した史・資料は主として次の3点である。第一は、ポッツォ (Riccardo Pozzo) によってまとめられた18世紀の同大学の『講義要項』⁴⁾である。第二は、ゴルトベック (Johann Friedrich Goldbek) が1782年に公刊した『大学報告』⁵⁾である。第三は、哲学部正教授バチコ (Ludwig von Baczko) が1787年にまとめた『ケーニヒスベルク市の歴史と記述の試み』⁶⁾である。『講義要項』は近年のケーニヒスベルク大学大学史研究の進展にともなって、1996年に二巻本としてまとめられ、公刊された。同資料は大学の講義状況および大学組織の運営形態を明らかにしてくれる貴重な基礎資料として大学史家の注目を集めている。バチコの著作については、先に出されたゴルトベックの著作との間にかなりの重複が見られるものの、両者はそれぞれ当時のケーニヒスベルク大学哲学部の実態を伺い知ることのできる現存する数少ない資料であるといつてよい。

また、日本においては、豊富なカント哲学研究に比してケーニヒスベルク大学大学史に関する研究は近年まで皆無に等しい状態であったが、2001年度『大学史研究』において別府昭郎が「啓蒙期におけるケーニヒスベルク大学—教授・学問領域・国家との関係—」を発表し、同論文において前述のゴルトベックの資料が取り上げられ、その詳細な検討がなされている。本稿では、同論文に加えて、ゼレ (Götz von Selle) 『プロイセンのケーニヒスベルク・アルベルトゥス大学史』⁷⁾、およびガウゼ (Fritz

Gause) 『プロイセン・ケーニヒスベルク市史』⁸⁾ の研究成果も活用する。

1 18世紀後半のケーニヒスベルク大学哲学部

1495年のヴォルムスにおける帝国会議の結果を受けて、マクシミリアン二世 (Maximilian II, 1527-1576) が、帝国内のすべての領邦君主に大学をつくるよう要請したことから、1500年から1650年にかけて、プロイセンでは数多くの大学が誕生した。ケーニヒスベルク大学は1544年にプロテスタントの領邦国家の大学の一つとして、バルト海沿岸の現ロシア領カーニングラードの地に創立される。この時代ケーニヒスベルク地方は、ブランデンブルク選帝侯の一族であるアルブレヒト (Albrecht von Brandenburg-Ansbach, 1490-1568) の統治下にあり、彼の名前からケーニヒスベルク大学には「アルベルティーナ」という愛称が付けられた⁹⁾。カントが在職した18世紀後半の哲学部ではヘルダー (Johann Gottfried von Herder, 1744-1843) も学んでいる。哲学部は18世紀から19世紀にかけて、カントをはじめとして教育学者ヘルバルト (Johann Friedrich Herbart, 1776-1841), 経済学者クラウス (Christian Jakob Kraus, 1753-1807), 数学者ヤコービ (Karl Gustav Jakobi, 1804-1851), 芸術史家ハーゲン (E. August Hagen, 1797-1880), 天文学者ベッセル (Fr. W. Bessel, 1784-1846) といった優れた学者が在籍した。彼等の肖像画は1862年にケーニヒスベルク大学がパレード広場の新しい校舎に移ったとき、大学正面に掛けられることとなった。

1782年に刊行されたゴルトベック著『大学報告』によると、当時ケーニヒスベルク大学哲学部には、「ヘブライ語」、「数学」、「ギリシア語」、「論理学・形而上学」、「実践哲学」(1619年から)、「自然学」(1619年から1637年の間は医学部のものであった)、「詩学」、「弁論・歴史」という八つの学問領域が原則として設けられていた。しかしながら、こうした学問領域は正教授の都合によって常に改編された。1782年においては、

表1 1782年におけるケーニヒスベルク大学哲学部の正教授とその担当教科¹⁰⁾

	名 前	担 当 教 科
1	ボック (Friedrich Samuel Bock 1716-1785)	神学
2	ベルナー (Jakob Friedrich Werner 1732-1782)	弁論術, 歴史
3	ブック (Friedrich Johann Buck 1722-1786)	数学(算術, 幾何学, 三角法, 宇宙論)
4	カント (Immanuel Kant 1724-1804)	形而上学, 論理学
5	ロイシュ (Carl Daniel Reusch 1735-1806)	自然学 (理論物理学, 実験物理学)
6	クロイツフェルト (Johann Gottlieb Kreutzfeld 1745-1784)	詩学 (ラテン語の詩, 神話学)
7	クラウス (Christian Jakob Kraus 1753-1807)	実践哲学 (道徳, 自然法)
8	ケーラー (Johann Bernhard Köhler 1742-1802)	東洋文学

8人の正教授が表1のような担当に従っていた。

ドイツの大学ではそれまでの慣習に基づいて、神学部、法学部、医学部は上級学部、哲学部は下級学部と呼ばれていた。哲学部という学部は、もともと上級学部の予科である「文理の基礎学部」(Facultatis artium)に起源を持ち、ギムナジウムの発展にともなって教養学部へと昇格し、

「中世から近世初期に教養学部と称されていた学部は、十九世紀においてはすべての大学で哲学部と呼ばれるように」¹¹⁾ になったとされる。シェルスキー (Helmut Schelsky) は教養学部について次のように述べている。

「『バカラリウス』(baccalarius) というのはもっとも低い学位号であって。それは『^{アルティステンファクulteート}教養学部』, つまり, 『自由七科』—ラテン語・論理学・修辞学 (初巻分の書き方を含む)・算術・幾何・天文・音楽理論—の課程を修了したことを証明するものであった。この教養学部での勉学は, 『上級』学部, すなわち神学部, 法学部および医学部においての専門研究に進むための必修コースであったのである」¹²⁾。ケーニヒスベルク大学哲学部の八つの教授職も, 表1に示されるように中世において自由七科と呼

ばれた学問分野の内容を引き継ぐものであった。同大学哲学部の役割は、学生が豊かな教養を獲得し、専門のための基礎知識を身につけることにあった。このことは学則においても明記されていた。

また、18世紀ドイツの大学には「公」の講義と、「私」の講義という二種類の講義形態が存在した。「公」の講義は、ドイツ語で die öffentlichen Vorlesungen であり、『講義要項』にはラテン語で publice と表記される。また、「私」講義はドイツ語で die privaten Vorlesungen,あるいは Privatkollegia であり、『講義要項』では privatim と表記された¹³⁾。18世紀ケーニヒスベルク大学の講義形態について、ポッツォは次のように述べる。

「講義は、中世以来の慣例に従い、公的(publicus)講義と私的(privatus)講義とに区分された。在学生全員が出席できる公的な講義を行ったのは正教授である。私的な講義には、聴講料を払ったものだけが出席できた。他のすべての行事、たとえば学問的討論(Disputatio)、試験(Examinatio)、復習授業(Repetitio)のような授業も、当然のことながら有料だった」¹⁴⁾。島田雄次郎によれば公講義は「決まった内容を決まった仕方で伝達する正課の講義」¹⁵⁾と定義され、大学の学則によって厳密に規定される講義であった。したがって、私講義と比べると自由が利かないという性格を持っていた。また、ハーバマス(Jürgen Habermas, 1929-)はドイツ語における「公(Öffentlichkeit)」という語義の歴史について次のように述べている。「ドイツ語では、ラテン語の privatus からの借用である『privat』という語は…国家機構の圏からの排除を示す語である。というのも『Öffentlichkeit』という語は、それまでのうちに、絶対主義とともに完成されて支配者個人からも客体化された国家そのものに関して用いられるようになっていたからである」¹⁶⁾。実際、ケーニヒスベルク大学においても公講義(die öffentlichen Vorlesungen)には講義の仕方や内容について政府から指示が出されている。公講義は大学の正規の講義であるばかりでなく、国家そのものに関する、すなわち国家による監視・規制を受けるという性格を持つ講義であったということができよう。

政府による大学管理については、ボルンハク (Conrad Bornhak) の研究に詳しい。それによると、「フランクフルト・アン・デア・オーデル大学とハレ大学は直接上級監督機関の監督下に置かれていた」が、「ケーニヒスベルクとデュイスブルグは地方当局 (Provinzialbehörde) のもとで、あらゆる報告 (Berichte) と指令 (Anordnung) を通して、東プロイセン当局とクレーヴェの政府の監督下にあった」¹⁷⁾ ということである。こうした監督権に基づいて、政府はケーニヒスベルク大学の公講義に対してしばしば介入を行った。例えば、教育学講義の開講を例にとってみると、そもそも同講義は学制改革の一貫として政府に何か協力することが要請され、これに対して同大学が提案を行い開講したという経緯を持っている¹⁸⁾。教育学講義は哲学部の輪番制で開講されたが、1774年度冬学期にボック教授が1時間だけ開講すると公示したとき、政府は「教育学は2時間の公講義として行わなければならない」と指示を出している。加えて、翌年の冬学期に、同教授が教育学講義を私講義として行おうとした試みも政府によって却下されている¹⁹⁾。また、1778年ルター派宗務局長官²⁰⁾の職にあったツェードリッツ (Karl Abraham von Zedlitz, 1731-1793) は講義では必ず教科書を指定するよう指示を出している²¹⁾。

次に、講義の開講状況について『講義要項』で確認すると、ケーニヒスベルク大学哲学部は公講義として前述の自由七科の伝統を受け継ぐ講義と、正教授の輪番で行われた教育学講義などを開講し、私講義については実にさまざまな講義を開講していたことがわかる。1782年度冬学期の『講義要項』をみると、哲学部は60以上の講義の開講を公示している。なかには「フランス語」、「イタリア語」、「ポーランド語」、「乗馬」、「フェンシング」、「ダンス」、「食事作法」、「音楽」といった講義まで含まれていた²²⁾。

同学期においてカントは「形而上学」、「自然地理学」、「道德哲学」、「人間学」、「討論」の開講を公示している。「論理学」についてはロイシュ教授が担当している。ロイシュ教授は表1で示した通り「論理学」ではな

く「自然学」の正教授であった。このように当時、哲学部では異なった専門の教授が担当外の講義を開講することも珍しくなかった。哲学部の教授陣には、原則としてさまざまな学問領域の知識と指導力が要求されていたのである。加えて、ケーニヒスベルク大学では18世紀後半に指令が出されるまで、正教授が他の学部のパストを兼任することも認められていた。たとえば、ゴルトベックによれば、ボック教授はしばらくの間哲学部と神学部の二つの学部をかけもちしていたと報告されている²³⁾。また、上級学部では正教授間に主席教授、次席教授といった序列関係が存在していたが、哲学部ではこうした序列は設けられていない²⁴⁾。

給与についていえば、哲学部正教授の給与は一般にどの大学においても低いことが知られている。加えて、バチコはケーニヒスベルク大学は当時他の大学と比べても給与が全般的に少なかったと述べている²⁵⁾。そのため正教授の中には副業として神父やギムナジウムの校長を兼任するものもいた。また、教授や講師たちにとって私講義は重要な収入源であった。私講義の聴講料についてケーニヒスベルク大学では明確な規定が存在していたわけではないが、半期の講義に対して学生一人あたり平均4ターラー程度徴収したと言われている²⁶⁾。ただ、貧しい学生に対しては同大学の教授は「喜んで」無料で講義を受講させたと言われている²⁷⁾。

次に、哲学部と学内組織との関係はどのようなものであったか。ケーニヒスベルク大学は当時10人で構成される大学評議会によって学内運営が行われていた。評議員は上級学部の正教授2人ずつと、哲学部の年長教授4人より選出された。評議会は半期毎に学長を選出する²⁷⁾。『講義要項』で確認すると、学長は神、法、医、哲の伝統的な学部序列に従って、学部毎の輪番で学長が選出されていたことがわかる。同じ人物が二度三度と学長になることもあった²⁸⁾。また、各学部には学部長が一人ずつ任命された。哲学部の学部長には二つの仕事を与えられた。一つは学籍登録試験である。学籍登録希望者一人を審査する毎に学部長はおよそ2ターラーの試験料を得ることができた。入学者が貴族階級出身であったり、

ユダヤ人である場合は倍の試験料を徴収したようである。もう一つの仕事は学内の出版物の検閲であった。ケーニヒスベルク大学では専門の教授、学部長、学長の三人による検閲を通して初めて著作を印刷することが許されたとされる²⁹⁾。しかしながら、こうした検閲がどの程度機能していたかについては資料的限界のため判然としない。

最後に、哲学部と大学外部（市民社会）との関係について指摘しておく。ゴルトベックの報告によれば、哲学部の「ヘブライ語」（当時はオリエンタル文学と呼ばれた）の正教授は市内にあるユダヤ教会（シナゴーグ）を監視する任務が課せられ、これによって年間100ターラーの報酬を受けていたようである。この役目は1779年まで同職にあったキューペ教授が亡くなるまで続けられた³⁰⁾。また、哲学部正教授には一定の社会的地位が保証された。バチコによると、1693年の規定によって、ケーニヒスベルク大学哲学部の正教授はケーニヒスベルクの市長たちよりも高い地位（Rang）にあることが定められた。同規則の適応によって、員外教授や上級学部の正教授も市長より高い地位が保証されることとなったが、その位はいずれも哲学部正教授より下に位置づけられた。また、もともと哲学部には博士号を出す資格はなかったようであるが、この時期には哲学部においても博士号を授与する制度ができている。加えて、バチコによれば、哲学部で博士号を取得する学生に対して、哲学部はポーランド王ジーギスムント（König Sigismund）の代理として貴族の称号を与えることも許されていたとされる³¹⁾。

以上、『講義要項』、およびゴルトベックとバチコの記述をもとに、18世紀ケーニヒスベルク大学哲学部の実態について考察した。同大学哲学部は一部対外的に特権的な役割も認められていたが、基本的には18世紀までのドイツの伝統的な哲学部の性格を保持している。また、公講義は政府の監督下に置かれていた。

2 カント『学部之争』における哲学部の位置づけ

『学部之争』は「哲学部と神学部の争い」、「哲学部と法学部の争い」、「哲学部と医学部の争い」の三部から構成されている。しかしながら、第一部は1794年頃、第二部は1797年頃、第三部1798年に執筆されたと言われており、もともとはそれぞれ独立した短編論文であった。カント自身も当初これらを一冊の著作にまとめる予定はなかったと述べている。同書の成立事情についてはディルタイの研究に詳しい。第一部・第二部に収められた論文は執筆当初、政府当局の検閲を受け、出版が許可されなかった。これは1787年より新たに文部大臣となったヴェルナー(Johann Christoph Wöllner, 1732-1800)が宗教令、検閲令を強化したことに起因している。啓蒙君主フリードリヒ二世(Friedrich II, 1712-1786)の治世下では起こり得なかった事態に直面して、カントは苛立ちを示さずにはいられなかった。フリードリヒ二世は1749年の検閲令の中で大学およびアカデミーを排除し、両者に「言論の自由」を保証していた。しかしながら、後継者であるフリードリヒ・ヴィルヘルム二世(Friedrich Wilhelm II, 1744-1797)はフリードリヒ二世の精神を引き継がなかったのである。そのため、カントと政府当局との間に出版と検閲をめぐる緊張関係が生ずることとなり、それが『学部之争』の成立および記述内容に大きく影を落とすこととなった³²⁾。

『学部之争』「序論」において、カントは同書全体の軸となっている大学のあるべき姿を簡潔に示している。「序論」を当時のケーニヒスベルク大学哲学部の実態をふまえて読み進めていくと、その記述内容にはカント自身の大学理解とカント独自の理想とする大学像が交錯しながら示されていることがわかる。また、同書をカントの大学論として読むとすれば、これは大学について包括的に論じた書物であるというよりも、哲学部の意義を問い直すことを通じて、カントが理想とする神、法、医、

哲学部の在り方、およびその相互関係について提案した書物であるというべきであろう。

カントは「序論」において、分業によって学問全体を取り扱うことを提案した人間、すなわち最初に大学を構想した人間は「悪くはない着想」を持っていたと述べる。そして上級学部と下級学部という区分と呼び名は、学者ではなく政府によって設けられたものだという。その理由は、政府自身が上級学部の教授内容が「どのような性質のものであるか、あるいは公に講述されるべきかどうかということ」に関心を持っていたからであり、下級学部である哲学部は政府にとって「学説をみずからが適当と認めるとおりに述べてかまわない」学部とみなされるからであった。上級学部は政府にとって「もっとも強力でもっとも持続的な影響力を国民におよぼす手段」となる学部であるため上級学部と呼ばれるようになったとカントは説明する³³⁾。

こうした記述内容について、ヘルダーは即座にカントの大学史に関する理解は間違っていると批判した。ヘルダーは次のように述べている。

「『悪くはない着想によって』大学が生まれるわけではない。大学は学校(Schule)として生まれるのである。大学の目的は学校であることだ。だから、大学は『hohe Schule』というのである。大学は下の学校からの新入生をただ受け入れるだけでなく、教育し、国家の優れた構成員に育てるのだ」³⁴⁾。ヘルダーは大学の役割を「国家の優れた構成員を育てる」ことにあると述べており、哲学部はその準備期間であるという当時の大学に対する一般的な理解を示している。下級学部と呼ばれた理由について、カントは哲学部は政府の付属機関ではないためという独自の理解を示していたが、歴史的には一節で言及したとおり、もともと専門を修める上級学部に対して予科的な性質を持つためとされている。大学の起源をめぐるこうしたカントの理解について、カントの同僚であった医学部正教授の一人メッツガー (Johann Daniel Metzger, 1739-1805) は、ヘルダーの言うとおりのカントの理解は歴史的にみると誤りがあるが、これ

はカントが大学を「アレゴリカル」に示そうとしたためであり、その他の部分の表現については正しく適切であると擁護している³⁵⁾。メッツガーが「アレゴリカル」と述べたのは、『学部之争』の全体を覆う記述の性質であったともいえる。18世紀のケーニヒスベルク大学哲学部の実態に即してみると、それほど『学部之争』は「大学の本質」を追究しようとする意欲に貫かれており、大学における哲学部の位置づけに対して、まったく新しい意味を与えようとするものであった。

カントは哲学部の役割を論じることを通じて大学の在り方を問い直そうとする。『学部之争』に示されたカントの大学理念をまとめると次のようになる³⁶⁾。

- 1) 大学は学者による共同体であり独自の「自治権」を持っている。
というのは、「学者としての学者について判断できるのは学者だけだから」である（＝大学の自治）。
- 2) 上級学部は「政府の道具」であり、政府によって強く規制されている。上級学部の教授内容は、神学部は聖書に、法学部は国法に、医学部は国家によって認可された医療法規に基づいている。したがって、もしこれらの学部が哲学部のように「自由で平等な立場」から教授内容を変更するようなことがあれば、すぐに国家の権威を損ない、哲学部との間で「争い」を引き起こすことになる。
- 3) 政府は、ある教授内容が当該学部の公講義に取り入れられ、それと対立する教授内容がそこから排除されることを希望することができる。政府の権限は教える内容を決めることではなく、大学教師に教えることを命じることである。したがって、政府は教授内容に介入すべきではない。介入するような政府は受けるべき尊敬を失うだけである（＝学問の自由）。
- 4) 学者公共体である大学では、教授内容の真偽について吟味する専門の部門が必要となる。その任にあたることができるのは哲学部

だけである。哲学部は歴史認識の部門（自然学，歴史学，地理，語学，人文学）と純粋な理性認識の部門（純粋数学，純粋哲学，自然および道德の形而上学）を備えており，その研究対象は人間知識のあらゆる部分におよんでいる。したがって，あらゆる学問領域の真理を批判・吟味することを通じて，上級学部を統御し，それによって学内において有用な学部として存在することができる。

- 5) 哲学部は政府の立法ではなく理性の立法に基づく学部であり，「真理を公に提示することを目指す」学部である。哲学部は「理性が公に語る権限」を持つことによって自由に真理を判定することができるが，そのために真理をめぐる上級学部と常に争うこととなる（＝合法的な争い）。

ここで『学部の争い』における論点を三点にまとめて整理しておきたい。『学部の争い』の第一の論点は「大学の自治」，および哲学部における「学問の自由」の重要性を強調している点にある。17世紀から19世紀半ばまで，ドイツの諸大学では「学問の自由」の問題がたびたび取り上げられる。たとえば，1723年にハレ大学副学長の就任講演を行ったヴォルフ（Christian Wolff, 1679-1754）は，講演の内容が神を冒瀆しているとして，フリードリヒ・ヴェルヘルム一世（Friedrich Wilhelm I）より学外退去を命じられる。しかし，フリードリヒ二世が即位するとヴォルフは免罪されハレ大学に復職をはたした。そのフリードリヒ二世が1791年にこの世を去ると，次に即位したフリードリヒ・ヴィルヘルム二世は検閲を強化し，1792年出版されたカントの『単なる理性内における宗教』を発禁処分にする。このように18世紀ドイツの「学問の自由」は専制君主の恣意にかなりの部分が委ねられており，制度として保証されたものではなかったといえる。ディルタイは検閲制度に関してもドイツはかなり遅れをとっていたと指摘する。イングランドでは1694年より出版の自

由は認められており、アメリカでは1791年の合衆国憲法において、フランスでは共和国憲法において検閲は禁止された³⁷⁾。『学部の争い』における「学問の自由」に関するカントの記述には、こうした特殊ドイツ的な状況が色濃く反映されているのである。また、「学問の自由」に対するカントの考え方は、大学人としてのカント自身の態度にも示されていたことを併せて指摘しておきたい。

カントの伝記作家らによると、カントの講義の仕方はかなり自由なものであったと伝えられている。1778年に政令によってケーニヒスベルク大学では講義にテキストを必ず指定することが義務づけられたが、カントの講義の仕方はまったく影響をうけなかったようである。実際講義を受けた弟子の一人であるヤハマンは次のように述べている。「カントの講義ぶりはまったく自由なものでした。多くの時間には一冊のノートすら用いず、自用の教科書の欄外に若干の書き入れをしておいて、それを口述の糸口にしました。ほんの小さな紙片だけを授業にもってきたこともしばしばでしたが、それには自分の考えが小さな略字で書き付けてありました。論理学のテキストにはマイアーを、形而上学にはバウムガルテンを使用しました。しかしこれらのテキストは、ただその主なる章分けに従い、また時折はその主張の不適當なことを証示する切っ掛けをうるために利用されたにすぎませんでした」³⁸⁾。

また、『学部の争い』が出版された1798年、東プロイセン議会がプロイセン王に対して、ケーニヒスベルク大学で教育学講義が行われていないために、優秀な家庭教師が不足していると訴えを起こした³⁹⁾。当時カントは哲学部の長老教授 (senior) という立場にあり、学部長のロイシュとともにこの問題の対応にあたっている。この訴えに対してケーニヒスベルク大学哲学部は、1790年まで教育学講義は規定に従って開講されており、東プロイセン議会が教育学講義に関する不足を訴えるのは根拠がないし、最近ではヴァルト教授によるゼミナールも開設され、専門の教育学者による授業が行われていると回答した。加えて、教育学講義がなくても、

公講義に出席してさえいれば教師になる準備が整えられるという見解を示している⁴⁰⁾。カントは『学部之争い』の中で、もし政府が教授内容に口を出してきたら、哲学部は「われわれにまかせてもらいたい」と回答すべきだと述べていた⁴¹⁾。資料的制約のため、これ以上の詳しい事情はわからないが、この事例に見られる哲学部の回答は、カリキュラムに口出ししようとした政府に対して哲学部が毅然とした態度を示したものとして受け止められる。

『学部之争い』の第二の論点であり、最大の特徴とみなされてきたものは、理性を司る学部として大学における哲学部の役割と地位を向上させ、哲学部を中心とする大学づくりを提起した点にある。哲学および哲学部の役割を重視する大学理解については、フリードリヒ二世の片腕と呼ばれ、カントとも親交のあったツェードリッツにおいても共有されている考えであった。そのことはツェードリッツが1778年8月1日付でまさにカントに宛てた手紙の中に確認できる。手紙の記述は次の通りである。

「大学にいる学生をパンのための学問からとりもどすこと。学問の初心者が哲学についてより知識を深めれば、彼らは法学、神学、医学がととても取り組みやすくなり、その応用においても確実になるということを学生に理解させること。人間というのは日々のほんのわずかな時間だけ裁判官、弁護士、聖職者、医者であって、多くの時間はただの人間であり、そのときは他の学問が必要となるということを学生に理解させること。こうしたことをいかに学生に理解させるか、あなたは私に教えるべき立場にある」⁴²⁾

この手紙のなかでツェードリッツは学生を「パンのための学問 (Brodts Collegiis)」から取り戻すことの必要性を説いている。「パンのための学問」という言葉は、この手紙が出された翌年シラー (Friedrich von Schiller,

1759-1805) がイエナ大学教授就任講演において、学者を「パンのための学者」と「哲学的頭脳の人」という区分を設けて説明して以来、「パンのための学問 (Brot Collegium, Brotwissenschaft) という語句として一般化し、実用的な学問を軽蔑して示す言葉として用いられるようになったとされる。18世紀後半ドイツでは市民社会の職業教育要求に応じて数多くの単科大学 (専門アカデミー) が新設される。たとえば、鉱業アカデミーがベルリン (1770年), クラウスタール・ツェラーフェルト (1775年), フライベルク (1776年) に設けられ, その他にも獣医アカデミー (1790年), 工芸アカデミー (1796年), 建築アカデミー (1799年) が各地で次々と開校している⁴³⁾。「パンのための学問」が興隆し, 学問と産業の結びつきがますます深まるにつれて, 中世以来の伝統を引き継いできた大学はその存在意義を問われることとなったのである。

ツェードリッツは大学で哲学を学ぶことは「パンのための学問」に対する十分な準備を進めると同時に, 仕事をしていない時間, すなわち人間としての時間を充実させることに繋がると考えていた。しかしながら, こうした発想は哲学することの意義を信奉するドイツ啓蒙主義の象徴的な表現であって, 大学廃止論もささやかれていた当時の大学に積極的な存在意義を与える論拠にはなりえない。この点で, カントが提案する哲学部を中心とする大学の再構成は大学の意義を新たに問い直すものであった。ツェードリッツが指摘する通り, 神, 法, 医の上級三学部はいずれも「パンのための学問」を志向するものである。それに哲学部が準備過程として従属する限り, 大学は外見上「パンのための学問」を扱う教育機関にすぎない。カントは哲学部に「理性の立法」を司る権限を与えることによって, 上級学部と哲学部の関係を逆転させ, 上級学部と哲学部の「合法的な争い」を通じて, 大学に真理を探究させる特別な学究機関としての機能を与えようとしたのである。カントの提案は, 伝統的大学としての特徴を色濃く残していたケーニヒスベルク大学哲学部の実態, すなわち学生が上級学部への準備を進め, 幅広い教養を身につける課程

であったこと、をふまえると極めて革新的な提案であったといえる。

また、レディングスが指摘するように、カントは上級学部と下級学部の区分を通して、自立と他律、理性と国家、知識と権力といったさまざまな対立のアポリアを示している⁴⁴⁾。デリダはカントの大学モデルを「理性の一種の制度化」、「理性の学部化」とであると形容し、シェリングの議論に即して大学内に哲学部固有の場（理性の場）を持たせることの意義を疑問視した⁴⁵⁾。この問題について、加藤泰史は『学部の争い』をカント哲学における「理性の公的（公共的）使用」と「私的使用」の対立構造に焦点づけて読み解き、カントが市民に対して開かれた「批判的・公共的空間」として哲学部を創出しようとしていた点にこそ同書の現代的意義が見い出せると指摘する。加えて、「カントの大学論はたんなる『大学論』にとどまるのではなく、むしろその枠組みを越え出てひとつの『制度論』としても読み直される」べきであるとも述べている。ここでカントが哲学部という空間および制度を通して「哲学的大学」と「市民社会」の相互的な関係を構想していたという加藤の理解に依拠して、これを『学部の争い』の第三の論点として指摘しておきたい⁴⁶⁾。

では、こうしたカントの大学論は大学史においてどのような意義を持つものであろうか。

上述の三つの論点の検討を中心に以下で考察をすすめていく。

3 カント大学論の大学史的意義

平野一郎によれば、『学部の争い』は18世紀後半の大学論者である「ミヒャエリス以来の最初の本格的な大学論」⁴⁷⁾として位置づけられる。ミヒャエリス (Johann David Michaelis) は「大学が国家にもたらす利益」、あるいは「大学の学問がもたらす利益」という視点から大学について論じ、「大学は実学をもって国家に奉仕する存在にほかならない」という理解を示した⁴⁸⁾。したがって、実用性ではなく真理の追究のための大学を構

想した『学部之争い』はミヒャエリスとは対照的な大学論を提起していたといえるだろう。

カント大学論の大学史的意義を論じる際に重要となる論点は、研究史上の第三の課題として挙げた、ドイツの近代大学構想、具体的にはフンボルトによって創設されたベルリン大学との間にどのような関係が認められるかということにある。一般的に『学部之争い』はドイツ近代大学の祖とされるベルリン大学の理念的源泉として位置づけられ、ドイツにおける最初の近代的大学論として評価されている。『学部之争い』に示された構想はベルリン大学創設の理念とどのように繋がっているのだろうか。この課題を検討するために、まず同大学が創設に到るまでの歴史的経緯を簡単に整理しておきたい。

シェルスキーは、18世紀後半の大学を取り巻く状況として、相対する4つの立場が存在していたと指摘する。第一は、「ツンフト制度のなかで硬直化した大学」の学者たちであって、彼等は古い学問精神に固執し、大学改革の一切を拒否していた。第二は、学問に対して有用性を期待する人たちであった。彼等は専門的な知識を教授する単科大学の意義を高く評価し、時代遅れの制度として伝統的な大学の廃止を訴えていた。第三は実用的な機関として変貌をとげるべく大学改革を実行しようとする人たちであった。実際これを実行したハレ大学やゲッティンゲン大学は成果をおさめ、人々から称賛をうけた。そして第四が、学問や哲学に対する実利的な解釈を拒否しつつ、まったく新しい高等教育機関を組織しようとする人たちである。彼等こそベルリン大学の創設に寄与した新人文主義者やドイツ観念論者であった⁴⁹⁾。第二節の分析で示した通り、カントもまたこの第四の分類に属する大学論者といって間違いないであろう。ベルリン大学の創設理念は、フンボルトの『ベルリンにおける高等学術施設の内外の組織について』(1809)、フィヒテの『ベルリンの創設さるべき高等教育機関についての演繹的計画』(1817)、シュライエルマッハーの『ドイツ的意味における大学について』のなかに確認される。これに

加えて、今日ではシェリングの『大学における学問研究の方法について』も重要な参考資料とみなされている。

まず、近代大学としてのベルリン大学の特徴の一つは「教授の自由」、「学習の自由」を基礎原理として保証したことにある。これによって同大学は大学内部事項に関する国家の不介入を実現した。これは「ベルリンの自由」と呼ばれ、近代ドイツにおける大学自治の原型になったと言われている⁵⁰⁾。『学部之争い』および大学人として実践していたカントの「学問の自由」に対する態度は、ベルリン大学の創設の過程において一定の制度化をみたといえる。

次に、フィヒテやシェリングの大学論とカントの大学論との関係性について検討してみたい。フィヒテはその構想のなかで、ベルリン大学には神学部、法学部、医学部も置くべきではなく、哲学部のみあればよいと考えていた。加えて、シェルスキーが「学問の兵営と学問の修道院」と形容したように、フィヒテは学生たちが大学において世間の煩雑さから遠ざけられることが必要であると説いている。次に、シェリングであるが、彼はカントの『学部之争い』について上級学部と下級学部の区分が曖昧であると批判し、哲学は大学のなかに固有の場所をもつ性質の学問ではないと述べている。シェリングの議論についてシェルスキーは「新しい大学ならびに学問が市民社会の実用主義的諸要求から解放されること」が強調されていると指摘している⁵¹⁾。ここで取り上げた二人の哲学者は、しばしばカントの大学論の直接的な継承者として、ベルリン大学の創設に影響を与えたと指摘されている。たしかに、これら二つの大学論はカントの『学部之争い』の議論に触発されて書かれたものであり、大学における哲学部の位置づけに注目する点で問題意識も共有されている。しかしながら、『学部之争い』の第三の論点、すなわちカントが市民社会と大学との相互的關係を構想しようとしていたという加藤泰史の理解にたがえば、フィヒテにおいてもシェリングにおいても「カントの構想は歴史的には継承されることはなかった」⁵²⁾ということになる。

レディングスは大学史におけるカントの意義は「理性を基盤として近代の大学を設立したこと、その理性が、近代的意味において、大学に普遍性を与えたこと」⁵³⁾にあると指摘する。すなわち、『学部の争い』の第二の論点として指摘した、理性を司る学部として哲学部を中心とする大学を構想しようとした点である。ここにカント大学論の一つの先見性があったことは確かである。大学内における哲学部の地位の上昇は18、19世紀を通じたドイツ大学の大きな特徴であり、中山茂によればこうした普遍的理性の守護神である哲学部の上昇気運に支えられてドイツ大学は19世紀後半に「国際的声望」を勝ち得ることとなったのである⁵⁴⁾。しかしながら、それは同時に学問の専門化とも並行していた。ヤスパースによれば、哲学部は19世紀を経過して「精神的百貨店」の様相を呈すこととなり、これによってカントが『学部の争い』で示した哲学部という大学の統合性の鍵は失われてしまったのである⁵⁵⁾。

こうした事態は19世紀前半のケーニヒスベルク大学においてもあてはまった。ベルリン大学の創設の後、フンボルトの政策によって「ケーニヒスベルク大学は学科単位の学問的な発展が大きく進展し、能力が高く力のある教師を集め」⁵⁶⁾ることに成功する。そして哲学部は「正教授の枠をどんどん増やしていった」。しかしこれは同時に哲学部内の「専門化をどんどんとすすめる」ことでもあった⁵⁷⁾。その後、他の大学と同様哲学部の諸部門はそれぞれ学部として独立していくこととなり、大学を統括する機関としての哲学部の役割は見失われていく。また、「パンのための学問」との争いは依然問題として残されたままであり、正教授ローゼン克蘭ツ (Johann Karl Friedrich Rosenkranz, 1805-1879) は1835年に「大部分の私の学生は、中国の城壁に囲まれているように、パンのための学問の要求に囲まれている」⁵⁸⁾と大学を取り囲む状況を嘆いた。ケーニヒスベルク大学においてもカントの理念が実現することはなかったのである。

おわりに

本稿において明らかになったことは以下のようにまとめられる。

18世紀後半のケーニヒスベルク大学哲学部は8人の正教授から構成され、中世から続く伝統的な大学の哲学部として他の大学と同様、新入生に対し一般教養の教授と上級学部への準備過程としての役割をはたしていた。正教授はケーニヒスベルク市では上位の位階が与えられ、博士号の授与に際しては貴族号を与える権限を有するなど特権的な一面も持っていたが、給料は低く、学内運営をめぐる大学内の地位も神、法、医、哲という伝統的な序列に従うものであった。

こうした状況のもと公刊された『学部の争い』において、カントは哲学部に積極的な意義を与えることを通じて独自の大学論を展開した。その特徴は次の通りである。まずカントは、大学には「学問の自由」が確保されなければならないと説く。そして「政府の立法」に属した上級学部によるのではなく、「理性の立法」を持つ哲学部による大学組織づくりを提唱する。こうした大学論はカント独自の「理性の公的（公共的）使用」という言葉使いによって、市民社会に開かれた批判的・公共的空間としての哲学部の構想としても示されていた。

大学史において「学問の自由」の確保は、その後ベルリン大学で一定の実現をみることとなる。哲学部自体はドイツ型近代大学の基盤として19世紀を通じて大学組織で飛躍的な地位の上昇を遂げながらも、その過程において理性の光のもとであらゆる学問を扱うという機能は見失われ、カントが主張した大学を統一する学部としての機能をもつことはできなかった。また、「理性の公的（公共的）使用の権限をもつ」哲学部の理念はシェリングやフィヒテにおいて継承されることはなく、この点はベルリン大学創立をめぐる大学論の構想に直接反映されなかったといえる。

本稿ではカントの大学論について以上のような考察を行った。さらにカントの構想が大学史において、どのような意義を持っていたかを考察するためには、18世紀から19世紀にかけてドイツの各大学で哲学部がどのように発展していったのかを分析する必要があるだろう。また、レディングスは近代の大学論を読み直すことが必要な理由は、大学の危機に対する今日の「解決策」の圧倒的多数がこうした古典の言い直しに過ぎない点にあると指摘する⁵⁹⁾。21世紀の大学の構想を考える上でも、カントの『学部之争』はいまだにその思想的源泉となりうるであろう。

注

- 1) Wilhelm Dilthey, *Der Streit Kants mit der Zensur über das Recht freier Religionsforschung*, in: *Gesammelte Schriften*, Bd. IV., 1974.
- 2) 加藤泰史「大学空間と批判的公共性の問題」『ドイツ文化・社会史研究』第6号, 1999年, および「理性の制度化と制度の理性化—『学部之争』の現代的意義—」『ヘーゲル学報』第5号, 2003年。
- 3) J・デリダ (岩田靖夫訳) 「哲学を教えること—教師, 芸術家, 国家—カントとシェリングから—」『思想』718号, 1984年4月, Bill Readings, *The university in ruins*, 1995.
- 4) Riccardo Pozzo (hrsg.), *Vorlesungsverzeichnisse der Universität Königsberg 1720-1804*, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1996.
- 5) Johann Friedrich Goldbek, *Nachrichten von der Königl. Universität zu Königsberg in Preußen*, o. O. (Königsberg), 1782.
- 6) Ludwig von Baczko, *Versuch einer Geschichte und Beschreibung der Stadt Königsberg*, Königsberg, 1787, 1804.
- 7) Götz von Selle, *Geschichte der Albertus Universität zu Königsberg in Preußen*, Königsberg, 1944.
- 8) Fritz Gause, *Die Geschichte der Stadt Königsberg in Preussen*, 3. Bd., 1972.
- 9) Hans-Werner Prah, *Sozialgeschichte des Hochschulwesens*, 1978, ハンス＝ヴェルナー・プラール (山本尤訳) 『大学制度の社会史』法政大学出版局, 1988年。および, 中島徹「カントとケーニヒスベルク」『国士館大学教養論集』35号, 1992年11月, 39～53頁参照。

- 10) Johann Friedrich Goldbek, a. a. O., S. 82ff. より作成。
- 11) 別府昭郎, 『ドイツにおける大学教授の誕生』 創文社, 1998年, 254頁。
- 12) Helmut Schelsky, *Einsamkeit und Freiheit*, 1971, S. 16. ヘルムート・シェルスキー (田中昭徳ほか訳) 『大学の孤独と自由』 未来社, 1970年, 19頁。
- 13) 16世紀末から17世紀にかけて, とりわけ哲学部の講師は経済的困窮にあえていた。それを解消するために始められたのが私講義である。その後, 私講義によって「公」の講義は圧迫される事態となり, 大学と講師間の訴訟にまで発展した。結果, 私講義は正式に認められ, 授業の一部に組み込まれるようになった。梅根悟監修『世界教育史大系26 大学史 I』 講談社, 昭和49年, 109頁参照。
- 14) 坂部恵ほか編, 『カント事典』 弘文社, 1997年, 581頁。なお, 本文はポッツォが『カント事典』のために書き下ろした論文 *Die Vorlesungsverzeichnisse der Universität Königsberg im 18 Jahrhundert* を「18世紀ケーニヒスベルク大学の講義要項」として御子柴善之が訳したものである。
- 15) 島田雄次郎『ヨーロッパの大学』 玉川大学出版部, 1990年, 147頁。
- 16) Jürgen Habermas, *Strukturwandel der Öffentlichkeit-Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, 1990, S. 66., ユルゲン・ハーバーマス (細谷貞雄ほか訳) 『公共性の構造転換』 未来社, 22頁。
- 17) Conrad Bornhak, *Geschichte der preussischen Universitätsverwaltung bis 1810*, Berlin, 1900, S. 180.
- 18) ケーニヒスベルク大学における教育学講義の詳細については, 拙稿「18世紀ケーニヒスベルク大学における教育学講義—大学における教育学講義の開設と展開に注目して—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』 第48巻, 2001年を参照のこと。
- 19) Walther Schwarz, a. a. O., S. 48.
- 20) 「18世紀プロイセン教育監督機構は基本的に宗務監督機構と一体」であり, ツェードリッツは今日でいうところの文部大臣として, 以後1788年まで, 学制の改革に力を注いだ。
増井三夫『プロイセン近代公教育成立史研究』 亜紀書房, 1996年, 31頁
- 21) 1778年10月16日, ツェードリッツはケーニヒスベルク大学に対して講義では教科書を使用するように命じている。Emil Arnoldt, a. a. O., S. 251.
- 22) Riccardo Pozzo, a. a. O., S. 477-480.
- 23) Johann Friedrich Goldbek, a. a. O., S. 68.
- 24) Ebenda, S. 67f, S. 70, S. 77, S. 82-86.

- 25) Ludwig von Baczko, a. a. O., S. 333.
- 26) Ebenda, S. 333.
- 27) Ebenda, S. 333.
- 28) Riccardo Pozzo, a. a. O., S. 439-607.
- 29) Ludwig von Baczko, a. a. O., S. 339.
- 30) Johann Friedrich Goldbek, a. a. O., S. 86
- 31) Ludwig von Baczko, a. a. O., S. 334, S. 336f.
- 32) Wilhelm Dilthey, a.a.O.
- 33) Immanuel Kant, Der Streit der Fakultäten, in: Die Königlich Preussische Akademie der Wissenschaften (hrsg.), *Kants gesammelte Schriften.*, Band VII, S. 17.
- 34) Johann Gottfried Herder, *Johann Gottfried Herder Werke*, Bd. 8., 1998, S. 623.
- 35) Metzger, *Ueber die Universitaet zu Koenigsberg. Ein Nachtrag zu Arnoldt und Goldbeck*, Koenigsberg, 1804, S. 9f.
- 36) Immanuel Kant, a. a. O., S. 17-36.
- 37) Wilhelm Dilthey, a. a. O., S. 286.
- 38) Reinhold Bernhard Jachmann, a. a. O., S. 116-117.
- 39) Walther Schwarz, *Immanuel Kant als Pädagoge* (Pädagogisches Magazin, Heft 607), 1915, S. 57f.
- 40) Walther Schwarz, a. a. O., S. 57f, 同様の記述はゼレにも見られる。Götz v. Selle, a. a. O., S. 180.
- 41) Immanuel Kant, a. a. O., S. 19f.
- 42) Brief Karl Frh. von Zedlitz' an Kant, 1. Aug. 1778, in: *Kants gesammelte Schriften.*, 1917, S. 236.
- 43) Helmut Schelsky, a. a. O., S. 32. ヘルムート・シェルスキー, 前掲書, 41頁。
- 44) Bill Readings, op. cit., p. 58.
- 45) デリダ, 前掲論文, 300頁。
- 46) 加藤泰史, 「理性の制度化と制度の理性化—『学部之争い』の現代的意義—」 51 頁。
- 47) 平野一郎「カントの大学論—絶対主義下における大学の自由の存立形態—」『教育学研究』23巻第5号, 2 頁。
- 48) 別府昭郎「ドイツ大学史における18世紀の位置」『明治大学教職過程年報』No.

17, 5～6頁。

49) Helmut Schelsky, a. a. O., S. 38f, ヘルムート・シェルスキー, 前掲書, 49～51頁。

50) 高柳信一『学問の自由』岩波書店, 1983年, 15頁。

51) Helmut Schelsky, a. a. O., S. 83f, ヘルムート・シェルスキー, 前掲書, 113～115頁。

52) 加藤泰史, 前掲論文, 75頁。

53) Bill Readings, op. cit., p. 56.

54) 中山茂『帝国大学の誕生』中公新書, 1978年, 37頁。

55) Karl Jaspers, *Die Idee der Universität*, 1961, S. 105., ヤスパーズ (福井一光訳)『大学の理念』理想社, 1999年, 134頁。

56) Karl Rosenkranz, *Königsberger Skizzen*, 1842, S. 225f.

57) Fritz Gause, a. a. O., 592.

58) Karl Rosenkranz, *Briefwechsel*, Königsberg, 1926.

59) Bill Readings, op. cit., p. 62.

(ふじい・もとき 大学院教育発達科学研究科 博士(後期)課程)